

ルカによる福音 3

神の子、マリアに宿る

ルカ 1 : 26-38

ここに書いてあることを「美しい詩」として楽しむ人は沢山います。その場合、文学的感動はあっても、それほどの驚きはありません。しかし私たちの福音史家ルカが本気でこれを書いたと考えれば、そしてこのマリアという少女が正気であったとすれば、これは大変なことです。

マリアの言葉を借りて言えば、「どうして、そんなことがあり得ましようか！」です。「どうして」は“**How?**”でもあり得るし、“**Why?**”でもあり得ます。私たちはここに美しいロマンを読むのではなく、正面から、苦痛を伴うくらいの真面目な受け止め方を、してみようと思います。

確かに、20世紀とは言わず、すでにルネサンスの頃から、この記事をこの通りに受取るのは、現代人としての思考放棄ではないのか……こんな考え方は中世の人には大切だったとしても、今のキリスト者はもっとスッキリと、福音の本質だけを受け止めれば、ここは削っていいではないか……そういう考え方の傾向が起きました。

特に19世紀の半ばからは、教会内部の学者たちも、これを本気で受け止める必要は無いのだ、とする学問的理由をいろいろ考えました。その一つは、比較宗教学や宗教史の立場から、広い視野で周りを見れば、ギリシャの宗教や偉人伝には、似たような話はいくらかもある。多分、ルカやマタイはそういう所から考えを借りてきて、キリストの誕生を美化したのだ……とまあ、大体そんな風に考えました。

もう一つの試みは、信じる人たち自身の中からも起こって、もしこれが事

実であったのなら、「母だけから新生命が生まれる」ということは、科学的にいかにも可能であったか……を何とかして立証しようとしてしました。今日の言葉で言うなら、「クローン」か「コピー人間」というのでしょうか、まだそんな用語はありませんでした。聖書の記事の真実性を立証したいという善意の発想でしたが、この試みも不毛に終わりました。

こうして、「処女降誕」は今も、驚きと苦痛——知性の苦痛を含んだまま、聖書の読者の前にあります。私たちは、多くの現代人から笑われるのを覚悟で、ルカが記録したことを正面から受け止めて、その本質的な意味と「福音」との関係を抑えてみることにします。

1. 御使い、マリアに奇跡的受胎を告げる。 : 21-38.

26. 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。 27. ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。 28. 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」 29. マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。

天使の言葉、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」の第一語「おめでとう」は「ヒューレ」χαίρε で、文字通りには「喜びなさい」ですが、「やあ」とか「こんにちは」に近い呼びかけの挨拶です。英訳は昔は“Hail!”でしたが、最近では“Greetings!”としています。今でもギリシヤ語ではよく使う挨拶です。

古くはラテン語がこれを“Ave”と訳しました。“Ave, gratia plena, dominus te cum.”です。これは28節の後半、日本語では引用符「」の中の言葉のVulgata訳です。このAveの後にMariaの一語を挟みますと、“Ave

Maria, gratia plena, dominus te cum.” ——例えばグノーの「アベ・マリア」でお馴染みの“Ave Maria”の歌詞になります。

歌詞のそのあとの言葉、“*benedicta tu in mulieribus, et benedictus ventris tui*”はガブリエルの言葉の続きではなく、ずっと飛んで42節のエリサベトの言葉を借りています。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。」

カトリック教会の典礼文「アベ・マリア」は、ここまでは全く聖書の原文だけを使ってあり、最も聖書的な讃美歌ということになります。私たちが「アベ・マリア」を歌うことを避ける理由は、歌詞の結びの部分で、“*Sancta Maria, ora pro nobis*”以下——祈禱文で言うと、「天主の御聖母マリア、罪人なる我らのために祈り給え」となっていて、これはマリアが神と人との仲保者として、執り成す存在となっているので、聖書には無い思想がカトリック教会の教義として入り込んでいるからです。

こういう聖母観の起源は、「恵まれた女よ」を“*gratia plena*”と訳した人たちが、マリア自身が恵みの源とされて、人に恵みを分かち与えるという意味に理解したからで、「聖寵満てるマリア」というカトリック教会の正式の訳文に、よく現われています。

ところで何のために「アベ・マリア」の歌詞を引き合いに出したかという、御使いガブリエルの言った「恵まれた女」*κεχαριτωμένη*の一語はそんな、「恩寵を発散してはちきれぬ泉」というような考えとは反対に、これは受動態の分詞で、「神の恵み憐れみを頂いた幸いな女」という意味で、「マリア、お前は身に余る恵みと光栄を頂いたのだぞ。喜べ！」という祝福の伝達なのです。

マリアが事の内容を知らぬうちから「ひどく胸騒ぎがして」（口語訳）「戸

惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」というのも、そんな身分の低い、神に選ばれる価値の無い平凡な自分に、何か大変な恵みが与えられたという言葉に、ショックを覚えたのです。

2. 御使い、マリアに驚くべき事実を明かす。 : 30-33.

30. すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。 31. あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。 32. その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。 33. 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」

最後の部分は、旧約聖書に慣れていない人には、あまり意味を持たないかも知れませんが、これはユダヤ人たちが教えられてきた聖書の約束で、いつか神は必ずダビデ王の末裔を立てて、民をお救いになるという希望です。サムエル記や詩篇にも出てきますが、私たちはクリスマスに読まれるイザヤ書の箇所と結びつくと思います。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。」——イザヤ書 9 : 5, 6.

敬虔なイスラエル人であれば、この他にもいくつもの聖句を次々に思い起こしたはずですが、特に罪の贖いという深いところまで考えなかった人でも、イスラエルの民族的救済の希望をこの「**ダビデの王座**」という言葉から、すぐ考えたでしょう。その「救済者メシア」の母となる光栄が、いま自分に与えられた！そして「神の子」と呼ばれる一人の男子を私は生むことになる——マリアはそれだけのことは分かったのです。

ただ少なくとも、中世の修道士たちが考えたような、マリアは男子を知ることなしに子を生んだから、それでマリアもイエスも超人的にきよい——という伝統的な解釈は、確かに西洋的ロマンの香りはあるにしても、御使いがマリアに伝えた内容からは「ハズレ」のようです。

3. 御使いの裏づけの言葉とマリアの服従。 : 34-38.

34. マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知らないのに。」

神の御業とはいえ、マリアにはとても信じられない知らせです。これはザカリアとエリサベトの場合とは違い、彼女の理解を超越した不可能事でした。この“*How can this be?*” Πῶς ἔσται τοῦτο;——「どうしてその事があり得ましょう」という素直な質問が、ザカリアの不信と対照的だとは、よく言われることです。私はそんなにビックリするほど違うとは思いません。強いて言えば、先のザカリアの疑問 (: 18) は、“*By what can I be sure……?*” Κατὰ τί γνώσομαι; で、何か確実な証拠がないと私には信じられない……という所まで疑惑を表明しているということでしょう。飯島正久氏の註解に、「マリアは、率直にその疑惑を訴えることのできる婦人であった」と書いておられるように、やはりこれはマリアにとって天地がひっくり返る位、ショッキングなお告げだったと思います。

34 節にあるマリアの一言をルカが書いてくれたお蔭で、このとき起ころうとしていた事がらが何であったかが、読者の勘違いなどあり得ない位はつきりしていると、私には思えます。マリアはヨセフと一緒にいる前に、ヨセフをも他のだれをも知らないで、母となるというのです。

35. 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。 36. あなたの親類のエ

リサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。 37. 神にできないことは何一つない。」 38. マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで天使は去って行った。

マリアの疑惑への答として御使いが断言したのは、**神の命の息が彼女に働く**という事実でした。その小規模な予告として、エリサベトへ神の力がまず及んだのですが、奇跡として全く次元の違うことなので、マリアへの説得的な証明にはなりません。ここには一つの飛躍があります。この「**神には何一つ不可能はない**」という結びの一句は、そういう証明というよりは、「エリサベトの上に起こった小さな奇跡を見て、それと比較できない位の奇跡があなたの上に起ることを、信じられるか？」というチャレンジ（強い試しの呼びかけ）です。

神への信仰がなければ、そこは到底飛躍できないのです。この場面でマリアの年齢はまだ十代だったでしょう。その十数年間に父から受けたもの、会堂でラビから教えられた聖書とタルムード……そういうものが、彼女の信仰をすでにこの時点で形づくっていたのでしようが、普通の人なら、老年のエリサベトに起こった奇跡を見た位で、この飛躍はできないでしょう。しかしマリアはそれができたのです。

「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」
「はしため」は女奴隷です。彼女は、自分の思いや疑惑は全部捨てて主の意思に服することを告白します。

ルカはまるで何でもなかったように、マリアの服従の言葉を記しますが、本当はどれだけ大きな悲しみと苦痛を、彼女は身に引き受けたのでしよう。だれ一人信じてくれない形で、救い主の母になります。父親のない子を生むのです。恐らくは町中の人から軽蔑されたまま、申命記に基づいて「ふしだ

らな女」として処刑されることも考えねばなりません。そうでない可能性が果して何%あるか……それは絶望的ではないか？

にもかかわらず、マリアがこの言葉を口にしたということは、この時まで彼女にとって、神はどれだけ信頼するに足る方かが、確実になっていたのです。人は危機に立って、その時点までに与えられた信仰が、現実の力として力を発揮するものです。恐らく二十歳にも達していなかったこの少女の、その時点までの信仰的背景が、どれだけ深い純粋なものだったかを考えるとき、私たちはただ驚いて立ちすくむのです。

《 まとめ 》

前講の第2区分の表題に、「神が人間の歴史に介入し始める」という見出しを掲げました。神はもちろん、最初から人間の歴史に関わっておられるのですけれど、ここではいよいよ決定的な形で、生ける神が人間の生き死にを決する最終問題に手を触れて、「人の罪の贖いは、神自らの手でなされる」ことの宣言を、マリアという器を通して強引になさるのです。その聖なる御業のために神は、アダムの罪の性質と死の結末に縛られない「新しい器——第二のアダム」を人の世に送って、33年の間、ヨハネの言い方によれば、「天幕に住むように宿られた」のです。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。
——ヨハネ 1 : 14.

ヨハネがその目で見たのと同じ経験を、ルカはここに書き記そうとして、「肉となった言」、「父の独り子」の誕生の十ヶ月前に遡り、人が信じると否とに拘わらず、神の意思によるひとりの生命の始まりの神秘をこのマリアの口から語られた通りに、人間の言葉で記述したのです。

次に述べることは、いわば「付けたり」でして、六十年前の英国の統計による、処女降誕に関する信仰の調査報告です。私はこれを妥協のために引用するものではありません。また、この事はどんな受け止め方、信じ方をしてもよいと言うものではありません。私自身の信仰の持ち方は、以下約百回のルカ福音書講義をお聞き下されば、どなたにも明らかです。

この報告書は、1922年に英国教会のキリスト教教理委員会が、カンタベリーとヨークの大司教の命により提出したものです。その英国教会の正式の教理問題調査委員会の報告書に、こうあります。

“Many of us hold that” 「我々の多数の信じるところは、神の言葉が肉となられたという信仰内容は、必然的、不可欠的に——**integrally bound up with**——処女降誕の信仰と切り離せないものである。この事はまた現に、より多くの人々によって賛同される趨勢にある。」報告書はこう記した後に、次のような但し書きを加えています。

「しかし、神の言葉が歴史の中で人の形をとられたという全面的信仰を固持しても、なお我らの主の誕生は、人間のノーマルな誕生の条件に基づいて起こったと考える方が、首尾一貫して辻褄が合う (**consistent**) と考える人々もいることは、事実である。上記の両見解はいずれも、わが教会のメンバーによって抱かれるものであり、本委員会の委員たちも例外ではないが、私たちは、主の受肉の現実を100%受け入れるものであり、主が体を持ってこられた事実こそは、キリスト者の信仰の中心をなす真実である。」

言い換えれば、「この事実」を受け入れる限り、ルカとマタイが残した神の子の誕生の記事は、文字通りにではなく、文学として一クッションおいて眺める人たちをも、必ずしも見下したり破門したりはしない……という宣言と受け止められます。

ともあれ、私自身はルカとマタイの証言を正直に、真正面から受け止めて、全能者である神が、故あって、この方イエスを、驚くべき生命の神秘を働かせてマリアに宿らせたと信じて話を続けます。聴き手の皆さんが、「同感」でなくとも「友情」を持って受けとめて下されば充分です。あとはルカ自身があなたに、この出来事の真意を伝えるでしょう。

(1981/08/16)

《研究者のための注》

1. 私自身がこのルカの記録をどう受けとめているかについての論述は、2002年左京キリスト教会版「私の信仰の概要」——ニケア信条を叩き台に——の8～10頁をご覧ください。また書籍版「マタイによる福音」の第2講「インマヌエルという名の人」にも、私の信仰の理由を発表しました。
2. イエスが「人間の男性の生殖力によらず神の介入によって生まれた」（処女降誕）という、このルカの記事やマタイ1:18,20の明記する意図を文字通りに受容することに反対する主張は、近代の神学のみならず、文学作品にも何度も反復して記されました。これは現代に始まったものではなく、すでに古代のパピルス文献の中にも現われていました。参照：エレヌ・ペイゲルズ「ナグ・ハマディ写本——初期キリスト教の正統と異端」荒井猷・湯本和子訳、白水叢書。1945年エジプトのナグ・ハマディで発見された写本の一つ「トマス福音書」には「処女懐胎とか身体の復活とかの一般的キリスト教信仰を、ナイーブな誤解として批判している言葉も見出される」（同書）。この主の見解を含む文書は初期の教会が異端文書として処分したため、現存するものは僅かですが、今日新たに取り沙汰される異見は、すべて古代のパピリが主張した内容の「焼き直し」と考えて宜しいでしょう。
3. 「処女懐胎」の否定論は、いくつかの小説に採りいれられている「ローマ軍の兵士による不幸な妊娠」説が代表的です。女性として最も不幸な経験をしたマリアを守り、生まれた子を戸籍上「自分の子」として大事に育てたという解釈です。この説を採る人は、「イエスはそのような事故による出生をしたからこそ、人間の『多くの痛みを負い、病を知る人』として、罪ある人の救い主であることができた」と神学的理由づけをしますし、マタイ冒頭のヨセフ家の系図にタマルやウリヤの妻の名が含まれてい

るように、イエス自身の血の中に不幸な出自が隠されていたことは、「彼らの罪を自ら負った」救い主に相応しいと論じます。

4. 私の「処女降誕」理解は左京教会の“みちしるべ文庫 29”「私の信仰の概要」10 頁で、ニケア信条の条文を「採点」する形で発表しましたが、それに一言加えるとすれば次のようになります。——マタイとルカが明記した恵みの真相とマリアの言葉を理解するに当たり、私には現代の解釈学者と神学者が提出する尤もらしい解説と文学者の描く感動的筋書きよりも、『福音書の言葉の通りそのままに、天の父の業を正面から受け止めよ』という聖なる意図を、聖書の文からズッシリと重く感じます。記事の背後に異なる出来事を見る人、その方が福音の感動を現実的にすると主張する人の解釈に対して“聖なる闘争心”は湧きません。
5. 前項で「聖書の文から（福音書の言葉の通りそのままに）ズッシリと重く感じます」と述べたことの趣旨について補足します。神の救いの手が、例えばナザレのマリアへの“神のいきの発動で” ἐκ πνεύματος ἁγίου (マタイ 1:18) イエスという命として始まったという断言、また彼女が「男を知る」経験をしなかったのに、マリアの上から“神のいきが臨み” πνεῦμα ἅγιον ἐπελεύσεται、彼女に“至高者の全能の力が影を落とす” δυνάμεις ὑψίστου ἐπισκιάσει ことが生起した (ルカ 1:35) という簡潔な宣言は、「本当はマリアの受胎はこのメカニズムで生起した」とする、現代人への“説得的なト書き”より、真実の重みと衝撃を私に感じさせる点では、はるかに強烈だということです。私は必ずしも、中世の教会が教義として「鶉呑み」にせよと命じた公式を全て絶対化するものではありませんが、イエスの命を送った聖なる神ご自身が、「起こった真実はこれである」と明言された内容を、生の言葉のイメージを通してストレートに受け止めるのが、現象のメカニズムなどをもっともらしく「解明する」つもり
の解説より、神の御業の本質を受け止める上で新鮮かつ感動的だと実感します。ノアの「巨大な箱」κιβωτός, תיבה の力学的不可能性を証明する人も、古代宗教にある類似神話からの借用を承認する人も、また逆に「箱舟」の実在を「証明」するためにアララト山に座礁の痕跡と船体の残骸を発掘する探検に加わる人も、いずれも神が箱舟を通して肉なる人に恵みの業をなされた真実に触れることは無いのです。最後の部分は、クローンとバイオの観点からナザレの奇跡を「擁護」するつもりの人たちへの風刺です。

6. タルソのパウロが「処女降誕」に一言も触れなかったことを根拠に、マタイとルカの記事の重要性を否定し、これを、福音よりも後代の脚色と断定する人たちも聖書学者の中に見られます。私自身は、パウロが福音書の冒頭の降誕記事を否定したとは考えません。彼は「キリストを知るのも“肉によって”知る知り方は捨てた」と断言した人ですから、ナザレのイエスの出自については、マタイやルカのようには関心を持たなかったのだと理解します。
7. 「アベ・マリア」の歌詞は、カトリック教会の祈祷文によるものです。バッハの平均率ピアノ組曲 1 に乗せてグノーがつけたメロディは、慣例的な歌詞によりますが、同じ題でもシューベルトやトスティの歌のように、別の詩によるものはこの限りではありません。
8. 「恩寵に満てる聖母マリア」というのが、カトリック教会本来のマリア像ですが、最近の「フランシスコ会訳」は、「恵まれた者、喜びなさい」と訳して、従来の解釈から一歩外に出たように見えます。
9. マリアが「恵みを受ける必要を持ち、現に恵みを頂いている女」つまり私たちの側、こちら側に立つ……という理解については、1971 年大阪キリスト教短大での降誕祭のスピーチ「恵まれた女」をご覧ください。
10. ダビデの王座、また「ダビデの裔」として来られるメシアについての旧約聖書の背景は、サムエル下 7 : 12 以下、詩篇 89 : 26, 27 に見られます。
11. 「救う」עֲשֵׂה から出た名詞「救い」は עֲשֵׂה の他に הִצִּילָהּ や הִצִּילָהּ があり、「主は救い」という意味の人名は上記 הִצִּילָהּ の他に יִצְחָק (イザヤ) もあります。
12. ギリシャ教会の「受胎告知日」εὐαγγελισμός は 3 月 15 日ですが、これは降誕祭が 12 月 25 日と定められてから、逆算して決められたものです。
13. 35 節の霊が「降る」ἐπελεύσεται と力が「影を落す」ἐπισκιάσει はヘブライ文学の対句の形式を写していると見れば、言葉は違っても同じ意味を反復したものと理解して宜しいでしょう。ここでは聖霊は神の「命の息」つまり創造力、生命力という素朴な意味に解釈すべきで、「父・子・聖霊」の「聖霊」がマリアに臨んだ結果「子」が宿るという「ペルソナの関係」を機械的に適用すべきではないと私は理解しています。1981 年の講話「恵みのリレー」と 2003 年 1 月 12 日の講話「神の息吹としてのイエス」を参照してください。

14. 「あなたの親類のエリサベト」を5節と結びつけると、マリアは祭司職の実家にも繋がるのが分かります。マリアの両親の一方がアロンの家系に属し、他方がダビデの家系と考えれば、イエスがヨセフから血を受けていなくても、32節の「ダビデの王座」はマリアの家からも血統的に繋がることになり、後に触れる3章末尾の系図がマリアの家系という仮設と矛盾しないことが分かります。
15. I.B.の **McLean Gilmore** によると、処女降誕記事の真の意義は神学的なもので、初期の異端とくにイエスの人間性の否定に対する神学的反駁だと言います。この角度から見れば、「キリストの受肉 **Incarnation** の現実をフルに承認する限り、イエスの誕生が処女降誕によらなくても、イエスの存在自体の奇跡性は少しも減じない」という **Walter Russel Bowie** のような結論も可能になります。私自身は、それでは34節のマリアの言葉と35節の御使いの断言との噛み合いが意味を失うと思いますし、マタイ1章(18以下)の記述も説明しきれないと考えて、**Bowie** の主張には同意しません。